

交差 ボートとの出会いが人生の礎に

加藤建設代表取締役 加藤 正己（昭和56卒）

二人の愚息も山の上の学校にお世話になったことや、今もボート関係の業務に携わっているため母校とはいまだに繋がりがあり、時々気に掛けております。

私が入学してから目標も無くブラブラしている時に当時ボート部顧問の高田屋敏夫先生から、ボートをやってみないかと声を掛けられ、艇庫がある向浜に連れていかれ、何が何だか訳が分からないうちに船に乗せられました。ボートの練習を続けていくうちに、この競技がとんでもなくしんどいことが分かり、最初のうちは辞めることばかりいつも考えておりました。しかし、結局3年次の秋まで毎日授業が終わると学校からスケート場裏の艇庫まで黙々と自転車のペダルを



第三若美号による秋田港洋上風力洗掘防止工

こぎ、日が暮れるまでオールを握る生活が続いてしまいました。結局、自分はボートの試合で勝った体験が、高校でのわずかな成功体験だったので、その快感が忘れられず、大学に行ってもこの苦しい競技を続けたのだと思います。一昨年、弊社で採用した女性技術者の高校の理事長が高田屋先生だったことは不思議な縁を感じます。

ボートとの出会いは現在の自分の礎となっておりま。苦しい時にも頑張れる気力や体力、仲間や先輩、後輩との信頼関係を得たことはかけがえのない経験でした。現在もボートが縁で平成19年秋田国体や今年のデンマークチームのオリンピック事前合宿のコース運営も弊社でやらせていただきました。この合宿コースは本番と同じ規格であり、これらのコースづくりの技術は他社ではまねできないものと自負しております。

また、本業とは別に風力発電事業を平成15年から始めております。その当時から地球温暖化に対し警鐘を鳴らす番組が放送されていて、その中に北極の白熊が解けて小さくなった氷河の上に立ち尽くす姿やヒマラヤの氷河が消失している映像が映し出され、感じたことのない恐ろしい感覚を覚えたことが、風力発電事業を始めたきっかけとなっております。その後運よく東北電力の連携枠を獲得



平成19年国体競技施設整備事業

でき、当時秋田県で最大規模の28,800誌の風力発電所を建設することができました。この事業を共同で行っている住友商事が昨年母校で出前授業を開催しました。これが非常に好評を得たことで今年も実施することになったことは私にとってもうれしい限りです。

また、現在進められている秋田港・能代港の洋上風力発電にも事業参加しており、工事においても風車の周りに砕石を投入する洗掘防止工という作業を請負っております。その工事に使用したのが今年3月21日に完成した「第三若美号」です。最大吊り荷重300ト、積載重量2,200ト、最新鋭の施工管理システムを搭載した東北最大級の作業船です。もともと港湾洋上風力で使用する予定ではありませんでした。が、事業着手が予定よりも1年遅れたこともあり当該事業に使用しております。実際、この作業船は損得だけでは造ることはできませんでしたが、社員の協力と理解もあり、作業の安全性と効率性を求め思い切つて3年前に建造することを決

断しました。これからは、これらの実績や経験を活かし、この後に控える秋田県沖に展開される般海域の洋上風力発電所の建設に参加できるように営業展開を進めていきたいと思っております。

浅学非才の身で試行錯誤の連続のなか、いつも周りに支えられております。高校の同級生、同窓ということでお声を掛けてくれる先輩方、私の高校時代のことを思い出すと恥ずかしい限りですが、同窓ということで意思が通じ合えるのが、秋高の良さだと思っております。経年来弊社は創業65周年となります。経営理念である「自己研鑽、地域貢献」は校歌の4番の歌詞と繋がっていると思っております。在学中は歌詞について考えることもなかったのですが、この苦しい時代を経験して、その意味が分かってきたような気がします。これからも微力ではありますが、母校への誇りと感謝を胸に一步でも前に進みたいと考えております。

Profile



かとう・まさみ / 1963年旧若美町生まれ。新潟大学工学部卒。1987年(株)加藤建設 (<https://katokensetu.co.jp/>) 入社、同年代表取締役就任、2012年男鹿風力発電機取締役、秋田県中央建設業協会及び男鹿市建設業協会理事、秋田県ボート協会副理事長などを務め現在に至る。